

ア ジ ア 養 蜂 研 究 協 会



第 2 回 AAA 大会

インドネシア共和国林業大臣
Djamaludin 氏による開会の挨拶

アジア養蜂研究協会会長酒井哲夫教授、ご列度の来賓の方々、ならびにご参加の皆様、この第2回アジア養蜂研究協会大会という非常に重要な国際的行事にあたり式辞を述べさせていただきますことを誠に光栄に存じます。インドネシア政府を代表いたしまして皆様方、特に諸外国の皆様方を心から歓迎申し上げます。皆様方のご信任により会議の開催地としてインドネシアを選んでいただきましたことに感謝の意を表します。

1992年リオ・デ・ジャネイロで開催されました「国連環境開発会議 UNCED (地球サミット)」での宣言、特に森林綱領とアジェンダ21にも明らかでありましたように、今後とも自然資源を継続利用することが世界中の人々にとっていかに大切なことかは皆様もお気づきのことと思います。さらに生物多様性会議は生物資源の利用について慎重な態度をとるよう提言しています。この中にはもちろんミツバチも含まれております。またこの UNCED 以降、種の保存という考え方が生態系の保存という考え方へと変わりつつあります。これは種の保存のために、私たちが自然の資源の複雑で複合的な状態を尊重せねばならないということを認識したことにほかなりません。この見地から養蜂とその将来の発展に関する見解をこの場を借りて述べさせていただきますと思います。

皆様、先ほども申し上げましたが、森林生態系のような複合的な生態系のなかで、最も重要な要素のひとつにミツバチをあげることができるでしょう。いうまでもなく、歴史的にもミツ



図1 林業大臣による開会の挨拶

バチと植物界、特に森林はこの世に現れたときから相互依存を続けてきました。そこで、人類はこの点を理解した上で、そこから分相応な利益を得るために両者を利用・管理していかねばなりません。

インドネシア政府は、養蜂が貧困を緩和し、栄養不足を打開する非常に効果的な手段のひとつであることを実感し、国民にとってミツバチと養蜂がいかに大切であることを確認しております。養蜂は国民に多くの就労機会を与えてくれています。これを考慮して、インドネシアはありとあらゆる可能な手段を講じて養蜂を振興するというかたい決意をもっています。同時に私はこの会議のテーマとして「ミツバチと養蜂を社会福祉と持続可能な発展のために」が選ばれたことは実を的を得ていると思います。

過去においては、ミツバチがもたらす利益の主体はハチミツやその他の直接的な生産物に限られていました。しかしながらこの見解は後になって変わってきています。研究者によってミツバチが花粉媒介者としての役割を通じて農産物の増産を可能にしていることが確認されました。それらの研究によれば農産物の増産による金銭的価値はハチミツ、花粉、ローヤルゼリー、蜂ろう、プロポリス、蜂毒、蜂児などといった直接の産物の評価額を超えるといわれます。残念なことに私が聞き及ぶところでは大多数の人々、特にインドネシアのような発展途上国の人々はこの事実をまだ充分認識できておりませ

ん。この点については、私は十分に整備された支援体制のもとで、養蜂振興事業に対する人々の認識を向上させなければならないと考えています。

食糧農業機関 FAO の専門家である Zmarlicki 博士の研究によりますと、インドネシア、特に東インドネシアでは養蜂の将来は非常に有望です。一方にまだ解決されていない様々な問題を抱えてはいますが、これを励みにインドネシアは養蜂振興の道を積極的に模索しているところです。実際、何年も前からミツバチの営巣木として知られているマングリスやケンパス (*Kompassia* sp.) といった何種類かの樹木を法律によって保護してまいりました。

インドネシアの養蜂はそれでもなおここにご参集いただいた近隣各国に比べて遅れをとっております。私どもの国におけるハチミツ生産は蜜源植物側の潜在能力に比べて低くとどまっています。そこで私たちは 1994 年から 1999 年までの第 6 期 5 か年開発計画でハチミツ生産の増大を目指すことにしました。

この実現のための方策のひとつとして、蜜源植物の植栽があります。これは森林周縁部の緩衝帯樹林に他の樹木と混成させて蜜源を植栽するもので、養蜂資源となるような森林を維持することが地域住民にとっても有益であることから住民による森林破壊をも防ぐことができると考えられます。またこのほかにも種々の蜜源あるいは花粉源植物を植栽することを考えています。これはインドネシア産業林植樹事業、社会林事業、あるいは特例村落開発事業を通じて行われます。しかし私たちはこのような蜜源樹や花木の植林に関する知識が限られていることを認めざるを得ません。この機会に、UNCED のアジェンダ 21 に盛り込まれている提言に沿って、養蜂関係者間の国際的な協力を促進し、養蜂技術や知識を共有するために国際的な協力体制を促進しなくてはなりません。これこそが本会議のほかならぬ真の目的であることを信じています。

皆様、最近、木材以外の林産物の普及増大にお気づきのことでしょうか。先進国の急進的な

NGO には森林は非木材生産物だけを生産すべきだという考えをもっているものさえあります。この考えには同調しきれませんが、非木材生産物はきわめて重要で、その普及振興をすべきであるというのは私の持論でもあります。私どもの林業省は FAO の協力のもと 1995 年 2 月、当地ジョクジャカルタで開催されます非木材生産物に関する専門家会議を主催する予定でありますことをお知らせしておきます。私はここでも非木材生産物の普及振興に関する条項において養蜂の重要性を強調するつもりであります。

さらにここにおられる方々の多くが、UNCED の決議をうけて国連が組織した持続可能な発展委員会 (CSD) が 1995 年 6 月に森林管理を主議題として会議の開催準備に入っていることをご存じかと思えます。多くの組織が CSD に向け積極的に勧告を提出してきましたが、そのなかで、1992 年インドネシアでの包括森林会議、1992 年インドでの途上国のための森林フォーラム、現在進行中のマレーシアとカナダの政府間総合森林事業団、ヘルシンキおよびモントリオール勧告、中心会談などがあります。この会議においても CSD への呼びかけとして森林と係わる養蜂に関する勧告を作成、提言することがふさわしいかと思えます。

皆様、大会委員会からの報告では 7 月 28 日には中央ジャワのリガロで養蜂プロジェクトをご覧になる機会を設けてあるようです。土着のトウヨウミツバチと導入されたセイヨウミツバチとを用いるこの養蜂事業は林業省の監督下で行われております。皆様がインドネシアに滞在されておられるこの機会にこの国の森林事業にもご招待できればと思っております。

最後に、この会議の開催・運営にあたって多大なる尽力をいただいた大会組織委員会、ならびにガジャマダ大学に感謝いたします。皆様にとって実り多い会議となり、またインドネシアの滞在が快適であることを希望いたします。私はここにお集まりいただいた皆様方を通じて養蜂が地球の将来を変えることができるものと確信しております。

皆様、私はここに第2回アジア養蜂研究協会大会の開催を宣言いたします。神のご加護がありますように、ご静聴ありがとうございました。

ジョクジャカルタ 1994年7月26日
インドネシア共和国林業大臣 Djameludin

アジア養蜂研究協会会長酒井哲夫氏による開会の挨拶

YANG MULIA MENTERI KEHUTANAN, PARA HADIRIN YANG TERHORMAT (林業大臣、ご列席の皆様、こんにちは)。

第2回 AAA 大会を開催するに当たり、インドネシア政府、林業大臣、ガジャマダ大学学長をはじめ、インドネシアの多くの方々のご協力に対し、心からお礼を申し上げます。

ジャワ文化のふるさとと言われるジョクジャカルタにアジアの国々、大洋州さらに遠く欧米諸国からも、多くのミツバチに関係ある友人たちをお迎えしてこの大会を開催することができることを大変うれしく思います。

私は本年5月にAAA事務局長の松香光夫博士と共にこの大会の準備のために当地に初めて参りました。大会組織委員のアグス・スリスチアント氏に案内されて、国立養蜂センター、ガジャマダ大学、ジョクジャカルタ近郊のセイヨウミツバチ蜂場などを見学しました。インドネシアではトウヨウミツバチはもとより、セイヨウミツバチによる養蜂の振興にも国を挙げて努力されており、その発展がめざましいことを知ることができました。また一方、インドネシアの偉大なる文化遺産と伝統ある歴史を改めて見聞し、大変有意義なことでした。

インドネシアの皆様の親切さあふれるご協力により「ミツバチと養蜂を社会福祉と持続可能な発展のために」をテーマにアジアの養蜂発展と文化交流、さらに国際親善の花がこの会議の間に咲き、見事に実を結ぶことを確信いたします。

TERIMA KASIH BANYAK (ありがとうございました)



図2 AAA 会長による開会の挨拶

第2回 AAA 大会決議と提言

I. アジアの多様なミツバチ種を保存するための適切な養蜂技術の開発とその普及
本大会において以下の点が確認された。

- アジアは世界で最もミツバチの種とその遺伝的多様性に富んだ地域である。
- その全域においてミツバチと養蜂は、持続可能な農業および村落開発計画の中で重要かつ不可欠な要素となりつつある。
- アジア産のミツバチ種については、その生物学的特性と適切な飼養方法の理解が十分には進んでいない。
- アジア産のミツバチには多くの生物学的、経済的に重要な特徴が見出される。
- トウヨウミツバチ養蜂の主な問題点は、生息環境の変化、導入種であるセイヨウミツバチとの競争、サックブルード病などである。
- ミツバチによる花粉媒介の重要性は特にアジア地域ではまだ十分認識されていない。

以上の点をふまえ、本大会は以下を決議する。

- アジア地域のすべての研究機関、関係組織に対し、アジアのミツバチ種のうちで経済的価値の高いものから、その生物学と養蜂技術の研究に着手するよう促す。
- オオミツバチ、サバミツバチの生物学と養蜂技術の研究を目的とした作業グループをつくり、M. Mardan 博士 (マレーシア) を世話人とする。
- トウヨウミツバチの生物計測学、優良系統の選抜、育種を目的とした作業グループをつくり、L. R. Verma 博士 (ICIMOD) を世話人

とする。

- アジアのミツバチによる花粉媒介が、各種農産物の生産性の飛躍的向上にいかにかに貢献しているかを調査、研究し、ミツバチ生産物と花粉媒介の経済的価値を算出するよう促す。
- 各国内でトウヨウミツバチ養蜂とセイヨウミツバチ養蜂を、地域を区分して実施する。
- 養蜂植物を農林畜産生態系開発計画の重要な要素として組み込む。
- ミツバチ生産物を木材以外の森林生産物として奨励する。

II. AAA の目標と今後の役割

本大会において以下の点が確認された。

- AAA は今や組織として確立され、その機能を十分にはたしている。
- 第1回大会（バンコク）、第2回大会（ジョクジャカルタ）の開催に貢献した。
- アジアにおける広範囲な交流と情報交換の組織を作り上げた。
- 他の国内関係組織や国際機関との強いつながりを築いた。
- 効果的に AAA のセクションと各国の支部を組織した。
- AAA はアジアの養蜂家、普及事業従事者、研究者に対する支援をさらに効果的に行う必要がある。

本大会は事務局長である松香光夫教授とその同僚諸氏の AAA を実効性ある組織とするための努力に対し、感謝する。

AAA の目標と決議事項をより効果的、かつ速やかに実行するため、会議は以下を決議する。

- AAA は今後もアジアに適した養蜂の進歩のために努力を続ける。
- アジアに養蜂研修と研究のセンター（付録1参照）を設立するよう努力する。
- アジアの養蜂の進歩を目的とした地域的な研修、講習会、養蜂ツアーなどを企画し、技術の共有、伝播を計る、より緻密な交流と国際協力計画を促進する。
- アジア全域への養蜂の普及、振興とその情報伝達を目的として、研究と啓蒙を照準とする

アジアのミツバチ研究誌を発刊する。

III. インドネシア政府への謝辞

本大会は次の3つの計画を歓迎する。

- 1) AAA 第3回大会（ベトナム）1996年。
- 2) 高地のトウヨウミツバチに関する国際専門家会議／講習会（ICIMOD ネパール）。
- 3) 熱帯の蜂と環境に関する国際会議（マレーシア）1995。

本大会はインドネシア政府、特に林業省、植林、土地回復庁、およびガジャマダ大学に対し心からの感謝の意を表わし、特にここに銘記する。その強力な支援、優良な会場設備、温かなもてなしを受けて、本大会は成功し、参加者にとって格別楽しい経験となった。

大会組織委員会、ガジャマダ大学、その他関係方面の大いなる努力と熱意により、本大会はその所期の目的を十分に果たすことができた。

付録1

アジア養蜂研究、研修センター（仮称）の目標

1. おもにアジア産ミツバチについての研究、研修を行い、よりよい養蜂技術の開発とその普及をはかる。各種ミツバチ生産物（ハチミツ、ローヤルゼリー、蜂ろう、プロポリス、ハチ毒）の生産量を増し、その品質を向上させ、また、アジア地域で求られているハチによる花粉媒介の役割に応え、その強化を行う。それによって生存可能限界にある貧しい社会地域の人々の収入増加、栄養状態の向上も期待できる。
2. 養蜂の実技と科学的側面の研修によって、各種政府機関、養蜂組合、養蜂企業に対する養蜂専門家の供給源となる。
3. 養蜂に関する情報提供、助言と共に、国際協力の調整役として役割を果たす。
4. 地域各国における養蜂計画の企画、実行を支援する。